

精神科臨床 Q&A for ビギナーズ

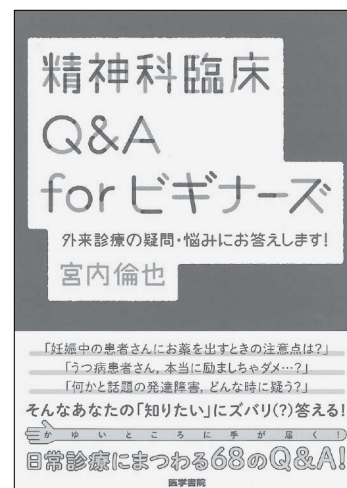
外来診療の疑問・悩みにお答えします！

宮内 倫也【著】

評者

松本 俊彦

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所



著者の略歴を見て驚いた。医学部卒業が2009年だという。ということは、医者歴7年目、精神科医歴は5年目か。「あり得ない」と思った。失礼ながら、「経歴詐称か」と疑いもした。それくらい本書の内容は充実している。

何しろ、本書は、若手精神科医が、喉から手が出るほど知りたい情報だらけなのだ。Q&Aの項目を2, 3見ればすぐにわかる。「慢性化したうつ病患者の促し方」「双極性障害には気分安定薬と抗精神病薬のいずれを使うか」「患者の自動車運転や妊娠・授乳の問題」……。いずれも日常精神科臨床の重要課題だ。

欄外のコラムがまたありがた。い。「次回の診察予約までの間隔をどうやって決めたらよいのか」「患者が予約日に受診しなかったら、自宅に電話すべきなのか」……。こういった疑問に答えてくれる成書などどこにもない。指導医に質問するのも憚られる。その点で、「かゆいところに手が届く」というのは、まさにこのことだろう。

ベテラン精神科医も真っ青の「診療のコツ」伝授もある。例えば、服薬したがる患者への対

応法については、説得ではなく、飲みたくない理由を尋ね、そして、その気持ちを認証した上で、医師として服薬の必要性を伝えよ、とある。なるほど、ただ「お薬を飲みなさい」と言ったのでは硬直した対立に終始するが、患者の気持ちをいったん受け止めてみると状況が少し変化する、というのはよくあることだ。

アルコール依存症についての記述もよい。“アルコールについての問診は、患者が「話を聞いてもらっているな」という実感を得てからした方がよい”“アルコール依存症患者の診療では、アルコールに頼らざるを得なかった人生に思いを馳せる”“依存症とは対人希求の病、つながりを渴望する病”。まさにその通りだ。

境界性パーソナリティ障害患者の行動化については、“その行動が持つ肯定的な側面も伝えながら制止する”“境界性パーソナリティ障害患者の治療では、『治療しよう』などと意気込まず、何とか生きてもらえるような『援助』の姿勢”とある。御意である。

精神科医歴21年の評者は、いちいち肯き、膝を叩きながら本書を読んだ。本書が全ての若手精神

科医の必読書となれば、間違いなくわが国の精神科医療の質はめざましく向上するだろう。

それにしても不思議だ。評者は、本書を読みながら、何ともいえない懐かしさを覚えたのだ。この感覚、どこかで経験したことがある。すぐにわかった。そうだ、これは、自分がまだ駆け出しのころ、夜遅くまで精神科医局に居残って酒を飲みながら、少しだけ先輩の精神科医にアホな質問をしていたときの気安さ、それとよく似ているのだ。

最近の若手は、仕事を終わるとさっと職場を引き上げてしまう者が多いようだが、これからは、本書が「夜の精神科医局」の代わりを果たしてくれるかもしれない。

A5・頁308 2016年8月
定価：本体3,600円＋税
[ISBN978-4-260-02800-4]
医学書院刊